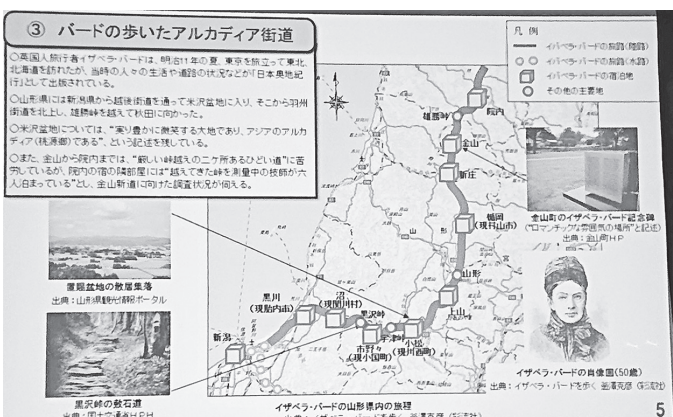


「地域による」展開にイザベラ・バードが貢献
——140年経て、アルカディア街道に「バードの巣」を

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

イザベラ・バード

いまから140年前の1878年、明治11年5月21日に、イギリスの女性旅行家、イザベラ・ルーシー・バード(1831年生)1904年没が、上海からシテイ・オブ・トキー号で、富士山を見て横浜に到着した。その目的は、本当の日本の姿を自分の目で見て、身をもって体験すること。



イザベラ・バードの山形県内の旅路
鳥居清三(1878) 山形県内
イザベラ・バードの山形県内の旅路
鳥居清三(1878) 山形県内

は、田園の風景の美しさに感動し、アジアのアルカディア」という称賛の言葉を残して北上し、山形、金山町などに宿泊した。さらに山形県から秋田県に入り、続いて青森県、そして津軽海峡を船で渡り、北海道の函館に向かった。函館、室蘭、白老、門別まで足を延ばした。アイヌの長老にも訪ねている。その後、函館に戻り、有珠、長万部、山越内、森、函館に戻った。東京への帰りには、函館から船を利用して、仙台沖では台風も経験した。6月に出発し、9月17日に帰京した。この間に踏査した距離は700キロであるという。この旅行では、伊藤吉が通訳と案内をしてくれ、完遂できた。



の、田舎の良さが、むしろ際立ってきた。いま「アルカディア」として、称賛する思いが増幅しているといえるだろう。

▼地域の人人々による「エコミュージアム」

地方や田舎の持ついい良さは、それを発信して理解を促めることが必要である。街道会議で、JTBの元社長の松山氏は、「新なるぶ」の重要性を披露した。かつてからの「見るぶ(見る・食べる・遊ぶ)」のほか、「体験する・交流する・学ぶ」の「新なるぶ」のコンセプトは、観光地での地域交流と地域理解が深まり、観光滞留時間を増やし、地方創成には必須である。

これを支えるのは、地元の人々であり、本コラムでも紹介した「エコミュージアム」の概念である(第26回、第97号、2018年2月5日発行)。

▼粕壁から日光へ

地方での第1泊目は、現在の春日部市(当時は粕壁)であった。バードにとっては初めての地方の体験。粕壁の人にとっては、外人女性は初めて見る存在。バードにとっては、ベッドで寝るのでなく、畳と布団、そして障子の部屋に眠れない夜を過ごしたという。まるで、今後も継続するであろう道中の苦労の試練であった。

▼『日本奥地紀行』

新潟の後は、山形県小国、小松、赤湯、上山に抜けた。そこで、バード

この旅行のくだりは、英国に居る妹に逐次手紙で送られ、それをまとめた出版されたのが『Inde atai Tracks in Japan』である。これは、英国ではベストセラーになり、日本を紹介した。その邦訳は、山形県川西町出身の英文学者・高梨健吉により、『日本奥地紀行』として、2000年に、平凡社から発行された。

バードも日本を旅して、大分慣れたころ、新潟から山形に山筋を旅して眼下に広がる田園地帯の情景に、イングランドの母国と重ねたに違いない。筆者も当地を訪ねたが、その地の景色は、確かに素晴らしい。

▼「アルカディア」の発見と展開

イザベラ・バードについての地域研究は、山形県で熱心である。今年2018年11月9日と10日には、山形市で、第14回の「どうほく街道会議」が開催された。筆者も同日参加したが、東北地方



地方が衰退し、都市と地方の差が出たことで、地方は地元民である。

筆者は、アルカディア街道でのエコミュージアムには、浸透している道(道)の駅(の)のほか、「バードの巣」と名づけた居場所をつくることを提案した。それは、親鳥がヒナに餌を与えて、ヒナと共に棲み成長する心地よい居場所の「鳥の巣」である。居場所は地域であり、ヒナは観光客、親鳥は地元民である。